
なかのひと

草原猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なかのひと

【著者名】

Z8286Z

【作者名】

草原猫

【あらすじ】
シヨーテシヨートです。

その日は休日だった。

世間一般の休日とは曜日がちがうが、僕の仕事はシフト制なのである。

とにかくその日、僕はリビングで、妻とともにテレビをぼんやりとながめていた。

とくに、なにか見たい番組があつたわけではなかつた。ただつけっぱなしにしていただけだつた。

番組は、子供むけのものだつた。着ぐるみが登場し、一般参加の幼児たちといつしょに遊ぶといった類のものである。

我が家にはまだ子供はないので、関係ないといえば関係ないが、べつに熱心に見ているわけでもなく、また気分がなごむこともあり、すぐにチャンネルを変えるつもりもなかつた。

ふと、ちょっとした思いつきをいつてみたくなつた。

「ひつじの番組つてや、着ぐるみに声優が声をあてるけど、現場ではどんな感じなんだろうね」

すると、妻はこちらのいつていふことがよくわからぬといつよう、可憐らしく小首をかしげた。

「だからさ、ああいう現場にいくような子たちは、当然この番組のファンでしょ？ だったら、テレビで声優があてている声と、現場での着ぐるみのひとの声とのギャップに気づくちゃうこともあるわけでさ。まさか、ジエスチャーだけでいつしょに遊んでいるとも思えないし」

「なにをいつているの？」

妻が、くすくすと笑いはじめた。

「なにひとつなど、いませんよ」

こんどは、僕が首をかしげる番だつた。

「いや、着ぐるみのひとだよ。そいつこそ、なにをいつてる

の？

「あなた」

なぜか、きゅうに妻の顔色がかわった。

「もういちどいうわ。なかにひとなどいません。いいわね？」
まったくわけがわからない。彼女はなにがいいたいんだ？
「いいわねといわれても。だって、なかにひとがいなかつたら、どうやって動いているのさ？」

「それは、ああいう生き物だから

どさり。ベランダに、なにか重いものが落ちたよつの音がした。

「おや、なんの音だ？」

「ああ！」

いきなり、妻が僕に飛びついてきた。

「そんな音なんか、どうでもいいでしょ。なかにひとなどいないの。いないんだつたら

「どうでもよくはないだろ」

いいかげんうつとうじくなつてきたので、僕はすこし強めにいつた。

「泥棒かもしけない。ほら、はなれて」

絶対はなれないと、言葉だけならうれしいことをいう妻を引き剥がし、僕はベランダを見にいこうとした。ところが、いままさに力一テンをあけようとしたところで、突然、玄関の呼び鈴が鳴った。

「はて、だれだろう？ セールスかな？」

さすがに、来客のほうが優先だろう。そう思い、僕がそちらにむかおうとすると、またしても妻が騒ぎはじめた。

「だめ！ あなた、いつちゃだめ！」

「いつちゃだめって

玄関から、ドアをたたく音が聞こえてきている。というか、ずいぶん乱暴な叩きかただな、失礼な。

「わたしが見てくるわ。いいわね、あなた。なかにひとなどいないのよ

またそれか。しつこいなあ。

とりあえず、リビングのソファに腰をおろしていると、玄関から押し問答のような声が聞こえてきた。ちゃんと言いきかせますからとか、もう決定したことだとか、なんのことだ？

「おい、どうしたんだ？　お密さんは？」

いいながら玄関に出ると、異様な光景が目にはいった。

白衣に白手袋をつけ、白いマスクのようなものを頭からすっぽりかぶつたなものか　体格から考えて、おそらく男だが、妻の腕をつかんで、押さえこんでいたのである。

乱暴されているのか？　僕はどっさり玄関とリビングをつなぐ廊下を走ると、白いやつに体」とぶつかって突き飛ばし、そのまま妻を抱きしめた。

「だいじょうぶか？」

「逃げて！　あなた、早く」

すっかりおびえきった様子の妻を背中に隠して、僕はいましがた突き飛ばした男と対峙しようとした。瞬間、全身が総毛だつた。相手はひとりではなかった。五人や十人ですらない。玄関の外は、白いやつらで埋めつくされていたのである。

「な、なんだおまえら……うわっ」

叫び声もあげきらないうちに、白いやつらが家になだれこんできた。抵抗しようにも、数がおおすぎる。たちまちのうちに、僕は廊下の床に手足を大の字に押さえつけられ、身動きがとれなくなつた。「お願いです、彼にひどいことしないで。わたしが、わたしが身代わりになりますから」

そういうで、白いやつらのひとりに取りすがつた妻は、蹴り倒され、僕とおなじように体を押さえつけられた。

「やめる、妻に手を出すな」

僕は叫んだ。そして、必死に白いやつらから体を振りほどこうとした。

「はなせ。ひくしょう、おまえら、は、はなさないと、ただではす

まさないぞ」

しかし、おとなの男たちが、体重を利用して押さえつけているのである。どうする」ともできなかつた。

” i a n i o d a n o t i h o n a k a n ”
” n e s a m i o d a n o t i h o n a k a n ”

白いやつらが、口々に、どこの国の言葉かもわからない呪文のようなものをつぶやきはじめた。頭がおかしくなりそうだった。悪夢でも見ていいのだろうか。思わず僕は身震いした。

「きやあああ！」

悲鳴だった。あわててそちらのほうを見ると、妻が腕になにか注射のようなものをそれでいて見えた。

「おまえらあ！」

激しい怒りに、僕はかつてないほどの力を全身にみなぎらせた。そうしてめちゃくちゃに暴れると、なんとか白いやつらの「ひ、ひのり」に腕を押さえつけられたやつらを振りほどくことに成功した。

下半身にとりついたやつらを引きずるようにながり、僕は上半身の力だけで這うよにして、すこしでも妻に近づこうとあがいた。あとすこじ、あとすこじで手がとどく。白いやつらから、愛する彼女を守つてやれる。

だが、そこに、さらに数人がのしかかってきた。

「ぐつ……。はなせ！　はなせえ」

持てる全ての力をふりしぼって、僕は妻に手をのばさうとした。その腕も、白いやつらのひとりにつかまれた。

さきほど、妻に注射を打つたやつだった。そいつは、こちらが動けないと見るのであるや、あたらしい注射器をポケットから取りだして、僕の腕に突きたてた。

ちくりとした痛みとともに、血管に薬液を注入された。すぐに、頭が朦朧となりはじめた。世界から、急速に現実感がうしなわれていいく。

意識をとばなす寸前、最後に僕が見たものは、くちびるのはしか

ら唾液をたらし、あられもなく恍惚の表情をつかべる妻の姿だった。

(後書き)

なかのひとなじこません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286n/>

なかのひと

2011年3月14日03時25分発行